
恋するドーベルマン

くろひつじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋するドーベルマン

【Nコード】

N7563P

【作者名】

くろひつじ

【あらすじ】

クロスフォード財閥邸の番犬レオパルド。彼はお嬢様のことが大好きなのだが、お嬢様は図体の大きな彼を嫌って邪険に扱っている。果たして彼の想いが実る日は来るのか！？

玄関までの長い道のりを歩いて来たルーサーが、俺の前をのうのうと通りすぎた。

ルーサーは成金の息子で、お嬢様と仲が良い。

お嬢様にルーサーを絶対に襲っては行けないと教えられていたので、俺は黙ってルーサーを見ていた。その目つきは、きっと飢えた犬のそれだろうという自覚はあった。

「よっ！ レオパルド！」

ルーサーが俺に馴れ馴れしく声を掛けてきた。俺は犬らしく尻尾を振って飛びついたりせずに、ぷいとそっぽを向いた。

「……いつ見ても可愛い気がない犬だな」

ルーサーが吐き捨てると、お嬢様に頂いた純銀製の合鍵で白塗りの大きな扉を開けて、豪邸の中に姿を消した。ばたりと扉が閉まる。本当なら、俺も付いて行きたい。だがそれはお嬢様の命令によって禁じられている。

俺は、クロスフォード財閥邸の番犬レオパルドだ。いつ、どんな時でもこの家の家族と彼らの財産を守る使命がある。それは生まれた時から決められていた定めだった。

俺は幼い頃に、お嬢様のお誕生日にプレゼントされた犬だった。

お嬢様は生まれがどこなのかも分からない俺を可愛がって下さったが、段々俺の図体が大きくなってくると、俺を嫌って側に近づけないようになった。当然だ。俺は愛玩用ではない。愛玩用というなら、ドルチェの方が相応しかった。ドルチェはふわふわの白に近い金色の巻き毛をした雄で、俺と違って大きくなってもお嬢様に可愛がられていた。

「レオパルドはドーベルマンなら、ドルチェはトイ・プードルね。」

当然私はドルチェの方が可愛いから好きよ」

お嬢様はドルチェを側に侍らせながら、黙って床に跪いている俺を見下ろして仰った。俺の心には嫉妬というものは不思議と生まれなかった。自分が人から嫌われる番犬用であることを知っていて、お嬢様に好かれることなど絶対に無理だと諦めていたからかもしれない。

それなのに、ドルチェはお嬢様がない時に限って、俺に絡んできた。

「お嬢様はお前の事なんか捨てようと思っているよ」

「お前は図体ばかり大きくて、僕みたいに何の役にも立っていないよな」

そう囁いてくる内はまだ良かった。

「僕にとってはお嬢様なんか操り人形さ。お菓子だって車だって家だって土地だって、望めば何だってくれるもの。いつかその全てを奪ってやるんだ」

ドルチェがそう言った瞬間、俺は頭に血が昇って彼に襲いかかっていた。自分への悪口は許せるが、お嬢様への悪口は絶対に許せなかった。たちまち警護の者がやってきて、俺は捕えられた。そして連れて行かれた先にはお嬢様が両腕を組んで待っていた。事情を説明しようとしたけれど、お嬢様の顔を見てやめた。犬が話すことなど許さないという考えが、伝わったからだ。

「この馬鹿犬。今まで可哀想だからと思いついて留まっていたけど、考えてみたらあんたみたいな奴に情けをかける必要なんて全くないわね。今日からお前は番犬らしく外で暮らしなさい。ちゃんと番犬の役目を果たすのよ」

お嬢様はそう仰ってから、警備を呼びつけ、俺を邸宅の外に放り出させた。

昼も夜も邸宅の中からお嬢様とドルチェの戯れる賑やかな声が聞こえてきて、俺は惨めな気分させられた。水や食べ物は床に置かれた食器から食べて、小屋の中で身体を丸めて眠る。待っていたの

は、そんな辛い生活だった。それでも大好きなお嬢様の命令には逆らえなかった。

ルーサーが邸宅の中に入ると、いつもはお嬢様が彼と談笑される声が聞こえる筈なのに、辺りは静かなままだった。どうなさったのだろう。訝しく思っ、悪いとは思いつつも玄関の近くに近づいてみる。

「エミリー、俺はお前の事が好きなんだ」

「嫌！ やめて！ 誰か、誰か来て！」

お嬢様とルーサーの口論する声が聞こえた。警護の者はどうしたのだろう。咄嗟に扉を開けて中に入ろうとしたが、鍵が掛かっている中に入ることが出来ない。やむなく裏の扉に回るが、ここも鍵が掛かっていた。しかし表の扉に比べて耐久性が弱いことを俺はたまに知っていた。何度も体当たりすると、扉が壊れた。

有名な画家の花の絵や、海外から取り寄せた壺。数年ぶりに入る邸宅の中の様子は、昔と何も変わっていないかった。

「誰も来ない……！ まさか、父様は騙したのね！」

「人聞きの悪い事を言うなよ。協力して下さったんだよ」

俺は懐かしさに浸る間もなく、そんな二人の声がする居間に突入した。

今まさにルーサーが恐れ多くもお嬢様をソファに押し倒して、事に及ぼうとしていたところだった。

「助けて！ レオパルド！」

お嬢様が俺の名前を呼んで下さるのは、何年振りのことだろうか。俺は感激に目が潤んだ。

「何してるの！？ 早くしなさい！」

お嬢様の怒声にはっとして、逃げようと立ち上がったルーサーを殴りつけた。

「うわっ……！」

ソファから転げ落ちたルーサーが、床に叩き付けられた。お嬢様に相応しくない、軟弱な男だ。お嬢様の父上は、何故このような奴の言う事を聞いたのだろうか。

「これでよろしいでしょうか、お嬢様？」

俺は一応お嬢様に伺った。今まで自分の婚約者だから絶対に手を出すな、とお嬢様に命令されていたのを思い出したからだ。

「何言ってるの。融通が聞かないわね。もっとやって」

お嬢様がソファから起き上がると、ルーサーを睨みつけて仰った。「かしこまりました」

俺は嬉しさを隠しきれないで返事をする、ルーサーに襲いかかった。

俺がルーサーを殴ったり、蹴ったりする度に、お嬢様は美しい顔に嗜虐の笑みを浮かべる。それを見て俺はますます力を強めた。

「……もういいわ。その屑をうちから追い出さない」

俺はまだ満足していなかったが、お嬢様がそう仰るので、ルーサーを邸宅の外に放り出した。ついでに顔に唾を吐き掛けてやると、ルーサーがふらついた足取りで逃げ出した。もう二度と来るんじゃないぞ、と俺はルーサーの背中に向かって吼えた。

ルーサーの姿が見えなくなってから、俺ははっとした。俺もこの邸宅を出なければいけないのだ。未練を引きずるように、玄関から出ようとした。

「待ちなさい。レオパルド」

お嬢様の声に、俺はびくりと立ち止まった。振り返ることは許されていない。

「よく頑張ったわね。ご褒美よ」

お嬢様は俺の首を持って振り返らせると、背伸びをして俺に口づけをして下さった。お嬢様の唇はとてもやわらかくて甘い。俺はつい、お嬢様の唇の中に舌を入れてしまった。当然嫌がるお嬢様を手

で押さえつけて、更に奥深くに潜り込む。するとお嬢様に舌を思い切り噛み付かれたので、俺は口づけを中止した。

「っ……！ 何するのよ！」

お嬢様は顔を真っ赤にしてお怒りになった。その仕草もとても可愛らしくて、つい見とれてしまう。

「申し訳ありません、お嬢様」

俺は自分の弱さに呆れながら、お嬢様にただただ謝った。

「罰として、今日から私の護衛になりなさい！」

お嬢様は俺を指して命令された。犬から人への昇格だ。

俺は丁寧にお辞儀をして答える。

「かしこまりました、お嬢様」

これから楽しい日々が待っていそうだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7563p/>

恋するドーベルマン

2011年3月22日13時10分発行